

# 川柳雜誌

大正十三年三月三日第三號  
大正十四年九月一日發行  
每月一回  
一月四日

九 月 號

川柳雜誌 第二卷 第九號



川柳雜誌 第二卷 第九號 (大正十四年九月一日發行) 目次

初代川柳の話

坂井久良岐(三)

近作集

麻生路郎(一)

粒々集

蛭子省二 芦田美代子(五)

川柳納涼會

塚崎松郎記(三)

川柳家の戸籍調

庄萬よし(三五)

漫畫 夢二題

新茂橋より  
吉田きよし(三六)

募集句

本田溪花坊選(三)

泡銀類

麻生葎乃選(三)

近作柳樽

西垣松雨 共撰(三)

青明忌

井上刀三 比選(四)

理許嫁さくら咲く(上)

原史風  
麻生路郎選(六)

川柳塔

橋本二柳子記(六)

鬼灯

遲日莊主人(六)

雲の峯(表紙繪)

刀三、古城山、一聲、蟬翠、萬よし、放馬、柳路、史風、莢豆、松郎、二柳子

句作上の常套語

萬よし慢筆帳より(七)

編輯後記

馬行生(三〇)

古岡烏平

小出櫛重

麻生路郎

麻生路郎(二〇)

# 川柳 雜誌

第 二 卷 第 九 號

## 近 作

三橋樓にて(二句)

水の落ちる音ばかりしてひこりゐる

旅に出てしんから人にあたま下け

旅の話は手拭をしほらせて

子を泳がせて沖の景色は眼に入らず

子が泣いたミこで考へゆきつまり

猫の寫真なごも撮つてゐいゝ生活

資本家のための筆さはなり終り

すゞり箱のこしてぎつか出てしまひ

麻 生 路 郎

いひすぎた日は庭も掃き水も打ち

髪結はぬこもしまつの數に入れ

俺はもうあかんこきめてかゝるなり

若い燕死ぬ相談をされてゐる

二階のは若い燕こ知られたり

若い燕切符を買ふて渡される

若い燕今日も手紙をかいてゐる

若い燕へ不斷着を縫ふてゐる



# 初代川柳の話

坂井久良岐

初代川柳は名を勇之助を柄井三云つた、後勇之助を改めて八右衛門と稱し、俳諧の號を川柳三云つた。

八代將軍吉宗公の治世享保三年戊戌に江戸で生れたのである（此年人見蝶々、谷口鶏口等の俳人が生れ芭蕉門の金澤の北枝が死に千代女が嫁人をし初らぎりの吟をのこし、園女が智鐘尼に成つた）そして十一代家齋將軍の治世寛政二年九月廿三日に江戸で歿した。年は七十三歳の長壽であつた。柄井家は江戸で寛永寺を三代將軍家光の時、創立し比叡山の寫しを江戸に建てた時に、法親王に附隨して江戸へ下つた宮侍の家であつた。其寛永寺即ち天台宗の末寺に江戸淺草新堀端に龍寶寺があつた（新堀端、天台宗龍寶寺、龍寶寺龍寶寺がある）其門前に住んでる、數代後に初代川柳、其門前で生れたのである。爰でお

断りして置くは世上の書物に柄井八右衛門、江戸阿部川町の坊正なりとあるが、正しく云ふと龍寶寺門前町外數町の名主である。何故門前町と云ふかといふに、江戸草創の都市が變未は多く寺院を中心として發達した。寺なればその門前に町家が次第々々に出來上つたのである。そこで寺と云ふのも現代の寺院と違つて、一兩宗教上の關係で今の區役所とか町村役所と云つた宗教家で戸籍吏を兼ねたのが江戸の制度である。それは旅行には必ず寺判と云つた旅行券を持たねばならぬからである。何々宗の信徒の證明狀である。これに外國侵入防禦策で如何に當時の基督教が外國侵略の手段に使用されたか、理解される。それ故に江戸淺草第何區劃の戸籍吏若しくは小區長と云ふ役目に該當する。である。江戸自治制として町奉行があり南北に分れ交代

して事、當を市長にして警視總監を兼ね、司法部は町組の與力同心を下僚とし、行政部は町年寄、地主、名主、家主、自身番人等之に任じた。一切の自治は此機關で連轉され、町年寄は榎藤右衛門、館、市右衛門、喜多村彦右衛門の三家が之に任じ、直接奉行から布告がのれば之を三家より江戸市中の各地へ通達し地主より家主以下へ通達した。所が地主は其煩を避けて名主をして一切之に當らしめたので名主の權力も大に増大した次第である。今日で云へば區長以上の權力があつた事は云ふ迄もない話である。初代川柳はかう云ふ地位の家柄に生れた人である。

其學殖についての師系は分らない只談林派が俳諧の點者であつたことは其雅號川柳に云ふに見ても肯かされる『柳多留十六篇の見出しにある、名連中の名を詠み込んだ連句は初代川柳作で『俳諧騰』十四篇にある物の轉載だ云ふ説があるが、未だに其實物は發見されない。そこで談林派に云ふ物、江戸座に云ふ物に付いて語らねばならない。また此等の深い研究に進まないで、眞の川柳は深い理解をされないものであるがまだ『武士川』程度に止まつてゐる現状である。兎に角江戸の俳壇は其角一派の連句、談林の宗因所の連句等に占有され、芭蕉系の田園詩人は全く驅逐されてゐたのである。此連句は大名旗本等の智識階級から町家の人々に流行し其延長が前句付の大衆文藝に及ぼし遂に川柳なる一形式を生じた。それは全く多くの前句付作者の

中にあつて偉大な祖翁の感化努力に待つたのである。此故に世人は此成功に川柳點に云へる美稱を贈り此民衆市民詩の代名詞とし、それを略して川柳に云へば今日初代川柳の雅號を民衆詩、同一に稱せらるゝに至つたのである。

萬句合に云ふのは當時點者が前句附點者になるに必ず萬句合興行の試験をしたもので、大淀の三千風、井原西鶴の萬句を一人で咏むに云ふ催しから轉じ來た物らしく思はれる。此萬句合の摺初川柳選を再選して『柳多留一』とし吳陵軒可有木綿居士に云ふ人が佐屋久治郎川柳雅號を宮離に云つた書肆から出版したので實曆六年である。それから年々明治以前に追んでゐる。(其宮離の星蓮堂遺趾も震災に依り上野山下五條天神が移轉し後は高架鐵道に成り前はダルマ、米久等の飲食店に分割して今は知らぬもなくなくなつてしまつた)

幸に龍寶寺は燒けてバラック建ちではあるが、初代川柳翁(同夫人、一代川柳、同夫人、九世川柳前橋和橋同葬)の墓は何等の損失を見ず、墓畔の柳は燒失せたが再び根元より復活して盛に繁茂してゐる。別に寺の廣庭に初代手植の柳があつたが燒枯したので其遺材を小子が真取つたが、これも根本から三本の芽が榮えて居り、只五世の建てた祖翁遺詠の句碑は燒けて缺け失せた。及び三代目孝達(川柳)に其係略の墓二基は從前の通り寛政二年其儘の江戸を語つてゐるのである。九世川柳に云ふ

人の狂句はもとより感服しないが、兎に角此前島家で年々法事を営んでゐる事、幾多祖翁に關した著述「元祖二世三世川柳墓參法筵冒」等の書を殘した功績は没すべからざる物がある。

幕府吉宗將軍の際一番手古摺には心中である。これを相對死に改稱し嚴罰に處し、又不受不施の法華宗を嚴禁し流罪に處し、前句付半面の墮落し、一の賭博化した三笠付をも嚴罰に處した。初代川柳翁も此誤解の卷添を食ひて町奉行に呼び出されたのを「高枕是も日光細上なり」と雅頌の川柳を高調して奉行に頭を下けさせた杯の逸話は多少人の知る所である。

初代川柳の事ははらこ傍系文學であるので智識階級の筆述には餘り書かれてゐない。松浦老公の著述や蜀山人の著書又は極春暉の「北窓填談」平田篤胤の講話などに引用されてゐる位で黃表紙「誤歟大和功」に圖入で其角の雨乞ひに比して初代川柳翁の上下姿が講がれる。深い研究をされたのは正しく大正の今日只今云つし然るべきなのである。

明治二十八年中に余の自治出版した川柳雜誌「五月鯉」初代川柳號や美濃大鍛町田中蛙骨氏出版の川柳雜誌「青柳」に島田筑波氏著の川柳年表號を參考して貰ひたのである。

龍寶寺所在地は東京市淺草區榮久町四十一番地天台宗龍寶寺で厩橋上野間電車街路の厩橋寄榮久橋東詰である。淺草藏前三の輪開電車の十字路にもなつてゐるのである。龍寶寺の舊姿は

川柳雜誌「獅子頭」の口繪に掲げられてゐる。

序に申上げて置くのは龍寶寺は貧乏寺でありまして、二十年前小子寄進の柳翁位牌も焼失し悉皆焼亡しましたので震災見舞として關西川柳六團からの見舞金二千九圓餘をいかに有効に使用せんか苦心の結果一半を祖翁の位牌とし裏面に關西川柳六團時見舞金によつて作られし理由を記し、一半は「武玉川」八册を求め宮武外骨氏に貸與し「武玉川」第一篇の出版となつた次第で序にこれも御報告をして御厚意を偏へに感謝する次第であらう。

#### 川柳系譜 (明治二十二年十一月調)

元祖 別號無名庵、通稱柄井八右衛門、淺草阿部川町里正、年  
齡七十三歳、寛政二庚戌年九月二十三日(太陽曆十月二十日)  
卒ス(本年一百回)法號契壽院川柳勇綠信士、菩提所淺草區榮  
久町四十番地天台宗金剛山龍寶寺

二世 別號不詳、通稱柄井彌忠右衛門、右同斷元祖長男、年齢  
不詳、文政元年戊寅十月十七日(太陽曆十一月四日卒ス)本年  
七十二回、法號圓鏡院智月照信士、菩提所同前、墳墓は元  
祖右の方別にあり

三世 別號不詳、通稱孝達、右同斷二世舍弟年齢不詳、文政十  
丁亥六月二日(太陽曆七月十三日卒)法號但受院淨刹快樂信士  
菩提所同前元祖と合葬

みあるので、前文二世川柳さいふが誤信したのは三世川柳であつて、三世墓に信じたのは二世の墓であることが明かになつたので爰に謹んで訂正して置きます。

以下は四世狂句元祖人見周助・風流庵に號し赤阪臺町法安寺に葬られ、五世狂句佃島の水谷金藏、綠亭、風叟に號し築地二丁目本願寺別院に葬られ、六世水谷謹、和風亭に號し五世合葬、七世廣島柳翁、風也坊に號し、八世兒玉環、任風舎に號す當時の現存人。

## 我社と川柳忌

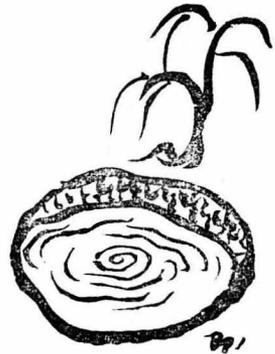
九月二十三日は初代川柳翁の百三十六回忌に相當いたします。我社では故人の偉業を追慕するために年中行事の一つとして川柳忌會を開催することに成つて居ります。(本年は十八日、別項参照)これは先人崇拜といふ單純な意味からでなく、私達の句が、みんなの伸びて来たか、果してのちある句としての伸び方

であるか、これからみんな傾向に伸びて行くべきであらうかなき、靜に考へて見ろ日として、この柳翁忌を記念したいと思ふに外ならぬのであります。斯うした意味で川柳忌を營むことは、ひゞり我社だけの問題ではなく、川柳をよりよきものにするために川柳に携はる人達の一考を要する點ではなからうかと思ひます。柳壇の現状では一二社をのぞ

こあり升。ソコで九世川柳は前島和橋に云つて日本橋生れの通俗小説家であつた。久良岐青年の頃宅へ平松銀行整理の際貯金として來訪一面の識がある。此人臂張亭、太九世の稱號を競争し之に打勝つた。十世は淺草の區吏、十一世は洲崎の酒屋で小林昇旭に云つた故人、十二世は全く知らない。かういふ川柳には系統を持つてゐる升が、考へれば狂句はよくくくだらぬこまばかり唄つて川柳を誤解さした詩の罪人であるこまを深く痛嘆する次第であり升。

いて川柳忌を眞面目に修するこまが殆んど行はれて居りません。私達は川柳忌が、もつこ全國的であるこまをのぞんで居ります。そして此の日を期して前にも述べましたやうに、思想的に練り、三省し、將來を卜し、これが宣傳を一齊に行ふこまにいたしたいと思ひます。

——川柳壇を前にして——



# 近作柳樽

路郎選

生娘のこんなこまでこはく見ね	大阪	眠聲	棧橋の際へ財布を落ささう	同
悲しみの錦紗は姉を細く見せ	同	同	馴れぬミシンにもうドンが鳴り	同
壺坂の又もそれから目がさへて	同	同	芝居も見度し會ふ日も待たれ	同
病身のやつぱりじみな柄をより	同	同	落籍して見れば相容れぬ癖	同
末の子のざつくばらんものを言ひ	同	同	三味線屋足抜きへちミ貸が有り	大阪
公休の今日は朝顔咲きもせず	同	同	三味線屋是が八千代かなと思ひ	同
俺達の世帯は裸でも住めて	同	同	繪日傘を三味線屋まで来てすほめ	同
バトロンミ舞妓は聞いてるものゝ	同	同	三味線屋化粧へ聲を掛けるなり	同
僕一人見る朝顔の淋しすぎ	同	同	さの糸が鳴つた三味線屋の掃除	同
叱られた通り轉寝風邪を引き	堺	春三	三味線屋落籍された事聞いて來る	同
まだ暗い驛へ出てゆく握り飯	同	同	エプロンを取れば二人の母さなり	同
朝顔の上へ竿竹ささミ落ち	同	同	交番へ信立袋世話を掛け	同
今釣つた鮒バケツから草へ跳ね	同	同	信心の柏手本社まで響き	同
賣られるミ聞いて娘は小さくなり	同	同	無難作に捨てる事にもなれて來る	京都
				文錢







# 句作上の常套語

(三)

麻生路郎

## (4) 「る」て止めた句

「居」で止めた句も澤山あるが「る」で止めた句は更に多い試みに柳樽をのぞいて見られたならば、その餘りに多いのに驚かれるであらう。そして柳樽に限らず現代の句にも、この「る」止めの句はさらに多い。

「る」止めの叙法は初學者にまつては、かなり作りいいらしいそれがために自然「る」止めの句が多いのではあるまいかと思ふ。しかし「る」止めの句には佳句が頗る少い。これは他の句と比較しての語である。

「る」止めの句の缺點とするところは句の調子が伸びて生温らくなることである。したがつて句意が弱められるし、時には散文の一部分を讀んでゐるやうな句となる惧れがある。

「る」止めの句は比較的作り易いから云つて、どんな句でも「る」止めにするこゝだけは避けなければならぬ。「る」止めは要するに靜かな句、寂しい句に適するやうである。

## 昔の句

なくさみに女房のるけん聞いて居る

(評) この句意は説明するまでもあるまい。措字の巧妙なこゝ、深みのある内容をもつてあるこゝなど、に於て「る」止めがよく利いてゐると思ふ。私の好きな句の一つである。

三味線屋 語り出すかと思はれる、  
(評) これよく見る圖で、説明をするまでもなく句意は明瞭であらう。

三味線屋の態度を髮髻せしめる點に於て上乘の寫生句だといふこゝが出来る。この句でも「る」止めに何等の不自然さを見ない

袴か隣りの亭主聞きに来る、  
(評) 慶弔何れの場合であるか、それは不明であるが、兎に角袴で出かけたものが、袴をつけずに縞もので行つたものが去就に迷ふた結果、お隣りへあんなことはどうしますか、聞きに来るさいふありふれた心算を事もなげに擱んであるところにこの句の妙味がある。

愛相に言つたを下女は本にする、  
女戻は淨瑠璃本をほんにする

(評) 右の二句は共に穿ちの句である。「本にする」は本當にする即ち信するさいふ意味である。古句には斯うした云ひ方もあるこゝを知つておけばいい。

角の石やうくいきて吸附ける、  
(評) 團扇で角の石がやうく生きたので煙草を吸附けたさいふのである。何れは笨基であらう。

似合つたさいはれて娘子をすてる

(評) 娘が姉の子か兄の子か抱いてゐるを、それはあんたのお子さんですか、やう似合ひます云はれて、人妻ならぬ娘の羞しさにアラいやな人さか何さか云つて子をもう抱かなくなつたのを誇張して「子をすてる」と詠んだのである。輕妙な句である

見こもなき亭主かきのけ能出る

(評) この句は説明するまでもない。「亭主かきのけまかり出る」で光景躍如たるものがあるではないか。下流社會で斯うした女をよく見つける。

— 今 の 句 —

夢ばかりみて青春をやせてゐる、  
 名人は教ねてくれず飲んでゐる、  
 秋の川魚の國も 見わたる、  
 ふり棄てられて氣が樂になる、  
 いつこなく病む子へ玩具強ひくる、  
 鼻先へ嘘々々の指が来る、  
 出來過ぎたお爛に短氣現れる、  
 無條件の儘お妾に子が出来る、  
 吉野へはまだ間もあるに酔ふてゐる、  
 蚊取粉へ母は焼香じみてゐる、  
 見つからぬ針姑に 拾はれる、  
 よく賣れるので變屈を出してゐる、  
 君見給へ渡蓑草が 伸びてゐる、

(5) 「よ」で止めた句

刀 三 葉  
 五 葉 守  
 美 濃 守  
 花 菱  
 乾 坤  
 紋 太  
 か ぼ ろ  
 柳 路  
 錦 山  
 零 骨  
 梢 露  
 茨 豆  
 路 郎

「よ」で止めた句を古句の中から探し出すことはかなりの骨折である。それほゞ古句の中には「よ」で止めた句がすくないのであるが、現代人の句には、古句に比べて遙かに澤山ある。

歸つても今朝はそなたは言やらないよ、  
 (評) 姑が嫁にいふてゐる言葉を籍りて立派に川柳の體をなしてゐるのである。斯うした叙法を口語體の川柳と稱してゐる。「よ」で止めた句は殆んど口語體の句だといふてもよい。

やほでもない、からまアこゝを放しなよ、  
 (評) 遊里の句である。今も昔も少しも變らないのが面白いではないか。

おきけずさきりく文を返しなよ、  
 (評) よくある圖だ。女からの手紙をかくして、オイ奢れ奢れば返へしてやるさ心やすい仲間同士でからかつてゐるのである。

待やれよのめる理屈が出来るによ、  
 (評) 説明をするにも及ぶまい「待ちやれよ」は「待つてゐたまへ」といふ意に外ならぬ。

現代の句には口語體以外に、詠嘆式の「よ」が多く用ひられてゐるが、その場合のよにはいや味さなつてあらはれることが多い。

— 今 の 句 —

あすのことはあすにして置けおい飲めよ、  
 それもさうですがお若いからですよ、  
 東京でなくても苦學でせよ、  
 双方が感謝してゐる至純さよ、  
 だまされたことを忘れる淋びしさよ、  
 あのこれね南京虫が囁んだのよ、  
 晝の風呂泳ぐ氣にさへなる父よ、

馬 行  
 眠 聲  
 同 路  
 柳 路  
 花 菱  
 美 代 子  
 路 郎

「おい飲めよ」「お若いからですよ」は古句の「まアこゝを放しなよ」や「文を返しなよ」などと同じ表現法であるが「至純さよ」「や」なる父よ」などの表現は前者と違つて詠嘆的であることに注意しなければならぬ。(つゞく)

# 川柳納涼船

八月九日夜

涼しい顔の人々

七夕の笹を流したしめやかなおこし、ひは過ぎた。今夜は我社主催の納涼川柳會である。連日の白雨に當夜を案じられたが、午後二時頃からさつと來た夕立は、暫らくにして街路樹に打水をほごし、道路の砂ほこりを止めて忘れたるが如く、すゞ風を残して晴れて行つた。途中で一緒になつた路那主幹三六時頃、新蛭子橋へ行くに萬よし店には店主ご放馬、二柳子君がヤア僕達へ手を揚げてこゝろ。浴衣の袖をまくり上げて鉢巻をした元氣者の放馬君が「もうちやんご船の用意は出來てまんねん」を先に立つて案内してくれた。橋の南詰には「川柳雜誌社納涼川柳會」を萬よし君の手で筆太に書かれた看板が立てられてあり、そこから石段を下りるに大きな船が一艘つけられてゐた。船のぐるりはアサヒビールの岐阜提灯に彩られて、船尾の方に川柳雜誌社納涼會とした紙が吊られてある船に乗つてから氣がつくに巖丈な船頭衆

が五人、毛壁を風になぶらせ乍ら出船を待つべく雑談をしてゐるのが心強く目につく。成程大きな船だ。五六十人は大丈夫だ。叫んだ。橋の上にはもう十數人の人達が、我々の船を見下してゐる。この間のキネマ俳優のそれかとも思つたのもあらう。そこへ珍らしい浴衣掛けの刀三君が例の燃わさうな頭でやつて來て「今迄松竹座へ行つてゐた」をそろゝ氣勢を揚げるしける君が來る。炭車君が來る。馬行君が「やあ」といふ聲で來る。珍らしい一聲が姿を見せる。漫畫家の鳥平氏も見える。双柳、太閤、一左、文久、山月君、だんご、船の中は賑やかなる。山月君がお手際なカメラのピントを合はす。世話好きの万よしの大將が何かを夫婦で働いて呉れる。元氣者の放馬君も浴衣の尻はし折つて共に手傳つて呉れる。大のバケツに何杯もなく氷が運ばれる。有志寄贈のビールが大箱の儘で運ばれる。

定刻の七時にはもう四十人程の参會者が  
見ゆ、尙陸續ミヤアノミ愉快な顔が見  
ゆるので豫定の時間を遅らせて、午後七  
時半愈々納涼船は新戎橋の岸をはなれた  
お土産の團扇が多き者に順次渡され、兼  
題「花火」一題「橋」が貼り出される、  
船は道頓堀川を東へゆるやかな流れを上  
つて行く、竣工間際の戎橋を抜けるご啓  
が一様、灯、映つたその美しい新装を見  
トける。吉井勇が讚美し、我川柳家のひ  
ましく四季を通じて獨專的謳歌する華や  
かな道頓堀を振出しに、こうしたのびや  
かな納涼船に、趣味を同じにする我々が  
集ふて、心ゆくばかりのしかも夏の夜を  
水の都の情趣を味はふゆたかな気分ひ  
たり現實の享樂を追ふ一々は、序々し  
て閉かれて行くのであつた。船内には橋  
の句作に耽るもの、雜誌を交し乍ら宗右  
衛門町の絃歌に酔ふものなごさりぐに  
美しい灯影に其顔を染める相合橋上の涼  
み人に見物人達の中から、遅れ馳せの夢

路、春皇君の聲を聞きつけて、船内よりお  
ーいさ呼應する。日本橋で乗船した二君  
を加へて船中同勢五十一人。船は馴れた  
船頭衆の櫓のあやつりによつて東へ、  
上つて行く、その橋々へ來る毎に橋行  
く人々の足を止める。東横堀へかゝつた  
頃から「頂戴」の聲も賑やかに席題句一  
橋一の披講が進む、披講の聲も、頂戴の  
聲が川端の家並や川面に飜するかと思は  
れるシーンが續く。「橋」の披講が終つ  
た頃船はもう大川へ出てゐた、  
ビールの満をひきつゝ、剣先に打ちくつろ  
ぐ。灯の大川、提灯をつけた無数のボー  
ト、涼しい風、アーク燈に映ゆる公園の  
樹木、ビールの泡、趣味の會合、團扇の  
書き、何たる情景であらう。あゝ僕の  
拙き筆の及ばず。  
やがて船は剣先を放れる。流れにつれて  
兼題「花火」(路郎選)を發表された。  
かうして意義ある納涼句會の一夜は更ひ  
て行つた。難波橋畔に名残りの船を止め

て一同當夜の盛會三川柳雜誌社の前途  
を祝つて萬歳を三唱して和氣霽々の中に  
散會をしたのは十一時過ぎる頃であつた  
終りに當夜の参會者諸氏に、晝間降雨の  
爲に場内の設備其世に不行届きの點を陳  
謝し、尙當夜の幹事諸氏並に萬よし氏の  
種々の勞を厚謝するものである。當夜の  
來會者ハ左の諸氏に尙福島縣の新島新坊  
大阪憲峯の兩氏より兼題句を送られた。  
(松郎記)  
路郎、鳥平、刀三、光太樓、眠聲、みのる、太  
間、双柳、古城山、長人、一左、祇梵、乾坤、朝  
哉、文久、一聲、瓦坊、炭車、信かす、一柳、佳  
鳴、一路、二葉亭、春笠、豊春、しげる、開路  
凡平、助六、かほる、のぼる、泗水、飯山、義  
矢滿、秀哉、欣遙子、山月、笠人、放馬、正坊  
柳蛙、夢路、輝翠、ひろと、突支坊、月兎、三  
笑、馬行、松郎、萬よし、二柳子(名簿より)  
花火(兼題) 路郎選  
其花火達摩はゆらりく落ちのほる  
花火見て子供得心して眠り 春 簾  
ボートから花火よつほぎ高いミ 開路

口開け一母へ花火のきれいすぎ 松郎  
 もう泣かぬ子へ色花火續くこゝ 萬よし  
 萬歳の聲に花火も負けて居ず 秀哉  
 子を抱いて見せる花火は又分れ しける  
 花火鳴る事を病室聞きこがめ 長人  
 炎揺ゑるものへ花火二つ三つ 飯山  
 嬌曳の矢張り花火をきれいがり 馬行  
 納涼へ仕掛花火の事も書き 憲翠  
 寐付かれぬ夜を窓に見る遠花火 新坊  
 團体へ花火の無駄を一つ見せ 夢路  
 ホテルまで花火時々響いて來 刀三  
 鏡臺の娘へ花火一發鳴り 凡平  
 遇然に花火の町の宿に着き 同  
 叱られてゐる子に花火また上り 光太樓  
 送られた方も花火に立ちごまり 同  
 (軸)花火線嫁入前の姉の世話 路郎  
 橋 (互選)

假橋に少し位の雨もよし 光太樓  
 欄干をかるう拂ふて立話 かほる  
 廣告燈橋から見るさ派手な事 炭車  
 橋一つこゝにて散髪値が違ひ 信かず  
 此邊にあつたんやでさ蜷橋 良坊  
 橋へ来て馬力はゑらい音をたて 聞路  
 假橋も思はぬ粹な人通り 山月  
 あの人も誰か待つてゐらしい橋 双柳  
 船頭の世帯が見ゆる橋の詰 みのる  
 假橋を急ぐ藝者の下駄の音 秀哉  
 舟だけのおかりさなき橋を越し 助六  
 橋詰で母屋の屋根を低う見る 春篁  
 そんな事知らず見合の橋もすぎ 眠聲  
 稻妻に橋が曲つてちらさ見ぬ 義矢滿  
 丸木橋やつこ相手の手を握り 酒水  
 橋の下船頭一寸上を見る 放馬  
 欄らずも腹を見られた戎橋 突支坊  
 橋の影映して手拭屋は仕舞ひ 古城山  
 すれくゞに橋をくゞつた家形船 正坊  
 涼み船橋の上からうらやまれ 同  
 橋まではだまつて歩く二人連 一左  
 橋の上あれから逢はぬ事に 同

橋の灯を映しだんぐゞ更ぎ行き 萌哉  
 側もかも忘れて橋の人になり 同  
 書割のさこまで渡る橋が出来 月兎  
 遊はぬさ遊ぶが橋でもめてゐる 同  
 假橋へ来て遠足の亂調子 乾坤  
 そこまでの涼みは橋へ来て止む 同  
 道問へば心覺の橋を云ひ 長人  
 橋詰でござけんさんの人に逢ひ 同  
 蝙蝠さいつしよに橋へ来る女 ひろし  
 妹を負ふて橋まで母を待ち 同  
 寄りそうて寄りそうて橋の袂 文久  
 虫賣りは橋から肩を替ねて行き 同  
 橋の上呑む相談をさめるさこ 三笑  
 橋越して遊興税を出しに來る 同  
 橋出來た當時非常に便利がり 一路  
 反り橋の上で拜んだ不信心 同  
 橋の名は其まゝ町の名か變り 輝翠  
 素つ破抜く様にボートは橋を抜 同  
 橋の下こゝにも動く物を見る 豊春  
 風のない橋に去年の色さんけ 同  
 橋下に船頭の聲ひびくこゝのほる

橋越へからは眞つすぐ傘をさし 同  
 橋へ来て涼みの人を黒う見る 二葉亭  
 知つた妓に橋の袂に叩かれる 同  
 橋の上御用提灯 右左飯山  
 藤椅子が一脚はしい橋涼み 同  
 橋へ来た伏見通ひの船の高 凡平  
 この橋を又覗かれる涼み船 同

棧橋へ今着きました顔で立ち 佳鳴  
 橋の上から満潮を見て戻り 同  
 橋二つ三つくゞつて風をほめ 馬行  
 橋の上嫁の涼みは目立つ也 同  
 散髪は橋を渡つて戻つて来 刀三  
 出世して戻る三橋の小さすぎ 同  
 橋来てしきりにつばを吐く待 路郎  
 倉の影と橋の影がのびちぢみ 同  
 空箱を捨て、欄干放れたり しける  
 御詠歌の聞える橋に立止まり 同  
 その一人將棋に負けて橋へ来る 松郎  
 やつこ子を寐さして橋を遠ざけ 同  
 涼み船これから先は橋がなし 夢路  
 風のない橋へ出て来て蚊にかま 同

# 粒々集

くらしむき

蛭子省二

あり合せ三つ葉も一つ浮いてるる  
 はんけちを洗つたあこで髭をそり  
 客が歸ればがぶがぶ呑む番茶  
 女房をねせて笠竹の仔細らし  
 先手をうつつて聴かす口癖  
 袴つけてトマトミ長茄子を切り  
 利久下駄葡萄棚まで音がする  
 正信 偈も耳なれて早飯の癖

# 手帳から

蘆田美代子

いんま見た白帆はちやんこ影を消し  
 お産婆へはしるやら湯をわかすやら  
 肌ぬいで團扇を持つた使が来  
 笑はしちやいやミ西瓜を下に置き  
 たれも居ず岐早提灯がまわつてる  
 ちうさんの引越らしい土樋の音  
 この驛へ来ててもやつばしおなじ月  
 海のそこみたいな蚊帳のうちねて  
 たてよこに竿のかゝるもあつくるし





# 青明忌

八月拾五日神戸  
中一俱樂部にて

八月二日がその祥月命日である藤村青明忌を、八月十五日夜、故人最後の住居地であつた神戸に於て開催致しました。當夜は過般來神戸に轉住されて居る豊田千龍齋氏より、缺席の旨、兼題句を添ひて美事なる果物を會場へ贈られ、故人の冥福を祈られました事を深謝いたします。當夜の熱心なる參會者は左の諸氏であります（二柳子）

路郎、紋太、乾坤、萬登、苔可、一閑子、ひろし、青波、彩霞、吐霞樓、南耕、柴陽、龍堂、梅雅、莢豆、契柳、一狂、太門、笑水、岳靜、夢水、明烏、素生、清公子、廣路、嶺月、山笑、琴月、東洋鬼、歌津坊、隨帖、風狂子、一蓮、枝山、夢遊、輝翠、萬よし、松耶の諸氏と二柳子。

海 (兼題) 紋太 選 蛸欺すたこ壺門へならべてる 莢豆  
結構な座敷で海の風をあび 南耕 臨海所海の樂屋を覗かれる 千龍齋  
登山隊海をながめて一休み 紫陽 ベットから海を眺め今日も無事 青波  
只海に親しむだけの夏休み 輝翠 床机から床机へ海の話なり 彩霞  
物思ひいつこはなしに海は暮れ 清公子 大小の波に三日月ゆれにゆれ 夢水  
海水着そのまゝ海へ行けるこゝ 岳靜 陸の荒れ海の荒らさも案じられ 嶺月  
燈臺を離れて廣く海 一狂 夏だけの家を海岸近く借り 一閑子  
心のきす洗ふ海邊に住んで居る 風狂子 満ち潮はこゝ迄云ふ藻を残し 苔可  
死ぬ管で海へ来たのに一日生き 萬登 明日は發つ宿屋に海の音をき、ひろし

海の家今日も將棋をさしてゐる 路郎  
駈落をする日になつて海があれ 太門  
海をまだ見た事ない云ふ親爺 同  
女房ご海で遊んで草臥れる 契柳  
新學期海で暮らした顔でくる 同  
峠茶屋今日のはつきり海が見ぬ 夢遊  
漁師町をこから海の嗅かする 同  
船旅を母はそれからこりてゐる 素生  
川口を出た遊船に波があり 同  
つくづく海の廣さを沖で知り 隨帖  
いゝ度胸持ち漁師の子海に馴れ 同  
影もなく水平線の陽を眺め 廣路  
潮鳴りを不安で明す留守の晩 同  
よく荒れたなあさ鷗の飛を見る 東洋鬼  
船酔ひに海の廣さが親しめず 同  
海岸で母親らしい人が待ち 技呂  
みす小屋を残して海は秋になり 同  
ワイシャツになつて涼しい海の風 同  
海からの風心地よく室に入る 笑水  
それ海が見わたさ窓を開けて。 同  
船は進む海たゞ着 風きに風き 同

海の水押すなく云つたやう 松 郎 洋館の横を通るに花が見ぬ 隨帖 姿見へついそこの帯の色 乾坤

美しい海に何にも忘れてた 山 美 洋館へ行くに石段二つ越ぬ 同 姿見へ見きつかりに坐り込み 龍堂

秘め事があるかの様に海靜か 同 洋館を的に行先き教ねられ 廣路 姿見を別に男衆汗をふき ひろし

水平線人道雲の出るごころ 同 勸め先母洋館を三丈けを知り 同 店の間も寫して姿見仕舞はれる 契柳

(人)夕風へ別莊蚊張をつりは 路 郎 洋館の四時順々に窓を閉め 枝 呂 姿見の中へ花輪の禮を言ひ 枝 呂

(地)心配へおんじを涙が来る 莢 豆 洋館の裏に大きいこもく箱 同 姿見へ待つてる情人が寫つて居 隨帖

(天)北に海控へて風に馴れて 嶺 月 洋館は釘の打場に又困り 彩霞 姿見を取巻かれてる嫁ぐ晚 廣路

(軸)用の漁師が見、海の荒れ 紋 太 居留地の洋館母に見せてやり 同 姿見をちこ引寄せて灯が寫り 紋 太

洋 館 一 閑 子 選 洋館を這入れれば不意に犬が吠ぬ 東洋鬼 姿見へ同じ浴衣で一人立ち 同

洋服へまがりまがつて道が出來 青 波 洋館を訪ね葉巻をすゝめられ 同 佳 句 姿見をもつ一度見る派手な帯 夢遊

洋館の倉に横文字の荷が入り 苔 可 港から見れば洋館多いこと 同 廻り道して姿見へ又戻り 山 美

洋館が建つて裏通り暗くなり 一 蓮 洋館の暮れて降らうが降るまが 松 郎 失戀はもう姿見へより付かず 一 狂

洋館の窓からピアノ掛けが見ぬ 南 耕 洋館へ下駄履いて来てよく喋り 同 姿見の後ろへ誰か来る氣配 琴 月

洋館のベン塗替へにこまる 葛 清公子 姿見へ惚れてる人の名を並べ 龍堂 姿見は一度出て来て又待たせ 隨帖

高利貸洋館の倉にいた男 萬 よし 姿 見 松 郎 選 姿見の中の三味線揺れてる 路 郎

洋館の一つ一つに英語なり 山 美 姿見へ姉を真似てる姉の留守 東洋鬼 姿見へ今脱ぎすてたものが見ぬ 同

洋館の窓から蚊帳が見わてる 太 門 姿見へ支度の出來た尻を撫で 彩霞 姿見へ今脱ぎすてたものが見ぬ 同

役場だけ洋館建ての小さい村 紫 陽 姿見に結び直す大儀なり 素生 姿見へ今脱ぎすてたものが見ぬ 同

洋館にスリッパがあり素足なり 萬 登 姿見へ姉の毛ずねがあらは也 莢 豆 保護願 互 選

洋館がちらばてる文化村 風 狂子 姿見へ半分女でるる樂屋 萬 登 保護願繼母つらい立場なり 嶺 月

洋館から扉冷たらしく閑ぢ 乾 坤 姿見の小猫へ小猫じやれかゝり 萬 よし 許す氣になつて急いだ保護願 隨帖

保護願したのも、送けたのはさ、岳 靜

保護願三度目さいふ娘なり 龍 堂

書喰へて出たきり云ふ保護願 一閑子

山へ海へ親籍へ警察へ 梅 雅

保護願東京までの金があり 萬 登

保護願長屋總出のやうに來る 契 柳

保護願老けて見ゆるさ云ひ添へ、一 狂

受付へ四五人も立つ保護願 南 耕

保護願取り消しに行く間の悪さ 枝 呂

保護願まだ年寄りへ云ふてなし 紋 太

身の耻も少し明して保護願 萬よし

保護願父は黙するばかりなり 同

保護願夜は誰れも寝ておらず 夢 遊

保護願日も矢つ張り降るらい 同

もう死んでゐるかも知、保護願 素 生

學校へ朝出たまゝの保護願 同

保護願父も説諭を聞いてくる 彩 霞

保護願顔のホクロを先に云ひ 同

さう見ても夫婦さ見ゆる保護願 吐露樓

保護願歸りに疊る空の色 琴 月

つきつめた氣に母かなる保護願 同

保護願其言ひ分に無理はなし 輝 翠

一三日隠して置いた保護願 同

保護願した夜ほんやり戻つて來 廣 路

行先はぼゞ判つてる保護願 同

保護願巡査あまりな事を聞き 清 公 子

保護願着のみ氣まゝが案じられ 同

保護願またしても叔父使はれる ひろし

保護願相手を乳母は知て居り 同

保護願に行つて一人の拘摸をみる 松 郎

保護願かかぎわの手でびんを、 同

保護願巡査のお辨見て歸り 同

保護願親から見ても男前 東 洋 鬼

親友が東京にある保護願 同

保護願女のあつた筈がなし 同

保護願後添無駄なものにみる 乾 坤

保護願頑固な父を説き伏せる 同

保護願もうこの邊さ手が廻り 同

保護願寫眞は二つ三つ若し 路 郎

まゝ車そのさいらうに保護願 同

薄 墨 互 選

薄墨の卷箱に烏濃く書かれ 岳 靜

拜啓さ書いてもう一度すり直し 彩 霞

物足りぬ心で薄い墨のあゝ 青 波

薄墨のまゝで受取り書いて置き 素 生

薄墨のにじむ悲しい心持 琴 月

判取を操れば薄墨許りなり 歌 津 坊

薄墨の最初一枚無駄になり 隨 帖

薄墨で書いて淋しい繪が出来る 東 洋 鬼

薄墨で慰み書いたを握られる 山 美

薄墨のまゝで書置亂れてる 夢 遊

薄墨でほかしたやうな宵の口 梅 雅

洗濯の薄墨になつてから落ちず 苔 可

薄墨、書く母親の御家流 太 門

薄墨でちり紙へ書きこぼづける 枝 呂

薄墨で言ひわけのない女文字 茨 豆

薄墨の返歌に急ぐ文使ひ 松 郎

路 郎

募

集

句

銀行

本田溪花坊選

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬行生

(一)姓名(二)推號(三)別號(四)現住所  
(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)  
好きなタイプの子(九)自信の句(一〇)川  
柳以外の趣味(一一)配偶者の有無(一二)  
嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(26) 岸本水府

(一)岸本龍郎(たつを)(二)水府(三)傘下  
堂、雑然店、番太郎、水呑野狐(四)大阪  
市南区玉屋町一番地(五)明治二十五年二  
月二十九日生(六)福助足袋廣告部(七)  
「越で矢張り妾になるさきめ」(八)毒婦  
型、但し氣心は真面目(九)「賣られたは  
三味線に手の届く頃」(一〇)浮世繪、明  
治趣味外二三の蒐集、食道樂、芝居、落  
語、日本物映講、旅、道ぶら(一一)有  
(一二)革新と稱する川柳、番傘を呉れ  
云ふハガキ、歌劇女優の細く刺つた眉、  
(一三)明治四十二年春

(27) 坪倉志貴南

(一)坪倉延金(二)志貴南(三)色雛(四)旭  
川市九條通十二丁目左三號(五)明治二十  
八年八月二十五日(六)腰辨(七)家計簿に  
生きる記録は史にない(小鼓)(八)同化し

銀行の電話不在へ二度かゝり 凡平  
行員が呼ぶ胸より上を見せ 南天棒  
銀行の金は出さぬさきめて居り 山月  
行へ這入るに女すねてゐる 薰流  
よい利息だつた銀行すぐつぶれ 逸錢  
けつたいな顔して銀行から歸り 蚊十  
銀行を出た足急に早くなり 光朗  
わが金を出さ銀行でひまが入り 琴月  
銀行で母は巾着逆に持ち 聞路  
銀行でこりこりしてる御両親 炭車  
忙しげにして銀行の月初め 憲翠  
銀行のひまカルトンを高う積み 露斗  
焼跡に残る銀行の大金庫 突伯子  
銀行は遠縁にして氣樂なり 愚劣  
銀行へ高ト駄で来た音をさせ 元山  
銀行の裏から入る出前持 千鳥  
銀行員馴染み見て口をきき 辰進子  
店員は銀行取りちこひがみ 樂居

銀行から中元貰ふ程にため 柳人  
銀行を出るに交番所が見ぬ 一路  
荷爲替を一度主席に相談し 仰天子  
香具師の立つ後に銀行聳れて居 吐露樓  
銀行へ女房に限る用が出来 突支坊  
氏神の寄附に銀行是非がなし 東城子  
又銀行ここへ建つさしやくな事 眠聲  
安心をさす銀行の預金なり 案山子  
銀行の前で人力車をまたせ 里魚  
割引に銀行は少し強く出る 白蝶  
銀行の應接室へ用が出来 幽里  
銀行の方へは結城着て出掛け 屏三呂  
嫁に來て銀行預金へつて行き 一聲  
銀行の窓で富久紗へ腕を突き 濁水  
珍らしく銀行の守衛今日は書き 三巴  
銀行の扇印を浮かすだけ 同  
銀行は、切さいふ門を閉め 万よし  
土地會社銀行の上の所にあり 同

赫土を盛げて撫子も桔梗も咲いてゐる、温泉町の裏山に、もう立ち初めし秋風の姿を柔らかき芒の穂さきを知るようになった。

小流れ水は、潤れし女鳥羽川の積の草の上に踞つて西眺するさ、乗鞍や鎗ヶ嶽の連亘は遙かに白雲を突いて、碧空に聳れて觀ゆる朝のすがすがしい氣分に魅つて、私はこの銀行の句を通觀しました。

作家の數さ句の量の多いのに、拜見してゐても實に愉快で堪へられなかつた。豫選から再選して私の心もちから見て劣つた。句

### 泡

この泡で序に洗ふ物があり 一路  
石鹼の泡美くしい陽を宿し 逸 錢  
見つめるミヤツバリ泡は五色が のほる  
押し出し様にビールの泡が飛び 辰進子  
洗濯の手が動きたび泡がふね 柳 人  
石鹼の泡を剃刀ぬぐひ取り 山 美  
山盛りの泡がコップを迂り落ち 樂 居  
石鹼の泡を小娘嬉しがり 元 山  
物思ひ泡のきねるを見つめてる 憲 翠  
今ぬいたビールの泡をおさえて 露 斗

は遠慮なく省いた。より以上の嚴選に全没となつた人々の多かつたことも、是非ないことである。

大阪にある周圍の環境さ、俗塵からかけ離れた峽谷の温泉町に起居して川柳を作つて見よう。さいふ心もちの差はあつても、公正に句に對する批判力、ものゝ觀方の隔たりは少しも變らない筈のものである。

悠うして精選した句に對して、天地人などの句の甲乙を付けたくない、どの句も一樣に佳句として頂戴したものであります(八月十二日信濃淺間温泉にて)

### 麻生 葭乃選

コスタンに汽船は凄い泡を立て 炭 車  
泡をふきながら徳 利 沈むなり 蚊 十  
水の泡こんな筈ではなかつたに 秀 甫  
泡のあるここへ釣糸たれてみる 琴 月  
泡立ちが消えるミビール八分目 案 山子  
泡のないビールのやうに年を 万 よし  
泣かされた子供へ泡の手を休め 凡 平  
明き書にビールの泡かにじんで 屏 三呂  
小さい顔累つてゐるシャボン玉 仰 天子  
女工先つしやほん屋に聞、泡の事 突 支坊

易い女(九)まだ受胎したばかり(一〇)庭球・魚笏(一一)あり(一二)西洋窓の家(二三)大正十二年十月

(28) 福 島 乾 坤

(一)福島乾(二)乾坤(三)無(四)大阪市北区玉江町二の六(五)明治廿五年八月廿五日生(六)大阪毎日新聞社(七)初心にて古人及び先輩の句を知るの範圍が非常に狭いので共鳴する句を揚げる事が出来ないが古句の「捨てる藝始める藝に惜しがられ」に共鳴しました(八)日本髪を結ふた日本固有の女性所謂近松式の女(九)川柳を初めて間もありませんから自信の句なにかありませんが自己の偽らざる實感を詠んだ句として溪花坊氏に依つて抜かれた「今日生きる力を朝の膳に見る」「(一〇)登山、旅行、運動(主として野球、庭球)圍碁、讀書、この外にまだ澤山あります(一一)有(一二)耳隠し、偽善、坊主、等々(一三)大正十三年三月頃から初めて句會に出たのは大正十四年四月十九日於端の坊川柳雜誌社主催編井花童子歡迎句會であります。

(29) 河 野 春 三

(一)河野春(二)ナン(三)ナシ(四)堺市

きぶくミ樽から榊へ淀む泡濁水  
 石鹼は泡ついたまゝほつミかれ白蝶  
 泡立ちまうつろの俺ミ澄んだ水同  
 人生は泡だ御二男遊んでる黙太  
 活動のみなけ泡だけみせておき同  
 許されぬ娘は海の泡ミ消ぬ一聲  
 瀧壺の泡だんくミ廣がつて同

住

サイダーの泡は暫く鳴り止まず里魚  
 一泡をふかせてくれん夜討なり案山子  
 泡立つビールへ二階からも来る萬よし

## 親類

松 雨 選

又嫁の事で親類揉めが出来眠聲  
 保険屋に親類の事つひ喋べり三巴  
 改札で待つ親類の遅い事辰進子  
 親類に紋付きを着る事が出来柳人  
 勘當の初手は親類迄の旅愚劣  
 親類は後家を通した例も引き木屑  
 親類があつたらなあミ出養生山月  
 親類が又失敗に遠ざかり案山子

西垣 松 雨 共 選  
 高橋かほる

親類の兒を育てる差し向ひ憲翠  
 親類にちミ氣を兼ねる家を建て秀甫  
 親類の家が列車の窓に見ぬ吐露樓  
 家出した息子親類まで戻り悟郎  
 親類へ行くミ繼母氣をまわし仁川  
 親類もお金の事は逃けたがり露斗  
 親類が寄つてたかつて顔かせ聞路  
 親類の顔を汚すも好い纏織萬よし  
 親類の端は泊つて去んだだけ同

岩越して泡みな元の水になり三巴  
 泡一つ残して緋鯉逃けてゆき屏三呂  
 泡も出て来る蟹の念佛茨豆  
 いそがしい泡が流れの脊を縫ひ同  
 孫もひ孫もその孫もつれた泡同  
 (人)谷川の泡に命の長短か三巴  
 (人)泡泡の中でクレープ白くのほる  
 (人)死にぎわを<sup>せめても</sup>泡舞見せ眠聲  
 (地)餅<sup>もち</sup>切<sup>き</sup>ミシヤボン<sup>の</sup>泡<sup>を</sup>捨<sup>て</sup>樂居  
 (地)藍壺の泡へ其日の風が吹き一聲  
 (天)泡たちを<sup>おぼし</sup>がいちめに來茨豆

中之町東一丁八番地(五)明治三十五年三月十日生(六)會社員(七)限りなし、抽象的に云へば人間性の閃きを見せて呉れる様に心理解剖の句、及び紋太氏の様なハツケリミした個性を見せて呉れる句(八)日本髪、顔よりも姿(九)投句當時は全部自信あり、後より見れば、一句もなし、(一〇)一般藝術、殊に文藝及び映畫、旅行(一一)目下設案中(一二)きらいな順にて、アメリカ、くわん、他人の自動自轉車、徳川家康、虚榮心の強い女、銀行の金網、外に川柳を作らぬ川柳家(一三)大正十二年夏、今日柳壇へ投句がはじめ。

(32) 黒木 莢 豆

(一)黒木慶男(二)莢豆(三)淑夫(號さいふ意味でなくす)ミ使つてゐます(四)只今鳴尾(五)明治三十年九月十九日生(六)寫真(七)さびしいも秋驚くも秋の空古句「ひるひなか蠅さる用があるばかり、君さ僕ミビールミ櫻んほ、路郎」ざりや仕事にかゝらうミ焚火してゐるよ、董哉「うめ千のたねの小ひさき朝餉にて、柳珍堂」等概して感じの強い句に引きつけられます。以上先輩の句には多く接す

博奕打つのが親類に一人居り 凡平  
 母方の親類いつも酔ふて去に 同  
 (佳)親類で無<sup>と</sup>飯を喰べて去ね 元山  
 (佳)其實は親類であり戀敵 琴月  
 (佳)花嫁へちこ親類が多過ぎる 凡平  
 (佳)遠縁に當る 子爵を<sup>を</sup>聞き 突支坊  
 (佳)保證する親類の名強く見え 南天棒  
 (軸)親類があります<sup>と</sup>驛を過<sup>す</sup> 松雨  
 保險屋に親類の事ついしやべり 三巴  
 親類の世話で來ました女中なり 聞路

# 工 事

工部屋雨に春の濡れるまゝ、愚劣  
 ぼんやりと工事を見てる居候 憲 翠  
 工事場へ砂利まつすぐにこぼれ 聞 路  
 御隠居の指圖を工事煩さがり 秀 甫  
 お天氣が續き工事の日が續き 露 斗  
 この工事親分力入れてゐる 蚊 十  
 銀行の工事が目立つ田舎町 光 朗

花嫁へちこ親類が多過ぎる 凡平  
 親類へ行くこまま母氣を廻はし 仁川  
 新町の親類へ行く用が出来 元山  
 親類のレコード借つたままに<sup>も</sup> 悟 郎  
 快よく親類を見る除隊の日 萬よし  
 親類も金の話にやあつち向き 山 月  
 親類の中で彼の娘がいつちよく 辰進子  
 親類の一人がうなる高砂や 秀 甫  
 親類の子供が泊る賑はしさ 光 朗  
 (人)女學校にやつて親類<sup>も</sup>なる也 炭 車  
 (地)時々は親類同志尋ね合ひ 露 斗  
 (天)新調を聞かねば親類承知<sup>す</sup> 叶露樓

## 井 上 刀 三 共 選

デリノ<sup>こ</sup>工事のミ<sup>こ</sup>電車來。 山 美  
 工事場は疲れた頃のドンが鳴り 里 魚  
 大工事今日もおんなじ杭を打ち 眠 聲  
 工事するまでの支店は鐵格子 叶露樓  
 繩張りの事で工事がもめてゐる のほろ  
 地下室の工事に隣ちこゆるみ 柳 人  
 假橋は工事眺める様に出來 樂 居  
 順調に工事の運ぶよい日和 逸 錢

るせいが澤山あります、其他にも澤山あ  
 ります(八)澄んだ感じのする、そして冷  
 たくない人が好き、小兒の持つやうなス  
 ルドイ感受性の働く人(九)「きりぎりす  
 うた、ねをしし子を捕られ」夏が來るこ  
 こんなのが好きになりますすが自信はあり  
 ません(一〇)母親をほんきに笑はしてや  
 りたいと希つてゐますがだめらしいです  
 (一一)私の好きなタイプの人(一二)私  
 りへつてしまつて不便利です時勢がもし  
 れません(一三)はつきりき判りませんが  
 蛇をみるこハツとします、勝負事はみん  
 なあまり乘氣になれません(一四)去年の  
 正月頃からです。

## (31) 原 史 風

(一)原計二郎(二)史風(三)旭公(筑前琵琶用)  
 (四)大阪市北區南同心町二丁目壹番地  
 (五)明治二十九年八月十一日(六)藥業機械製作販賣業  
 (七)碧梧桐の句「昨夜寝られず子に朝の櫻見せ」其他習味を帯びた句(八)丸髻の從順な女(九)頭腦疲れて難に餌をやり(十)筑前琵琶其他日本音樂、將棋愛妻の口論(十一)配偶者有り、女子二、外に胎兒中(十二)妹の洋装(十三)大正六年夏浪六の川柳自在を讀みて。

總會に關せず工事急いでる 松 郎  
 工事は請負らしい音をさせ 凡 平  
 工場でやられましたと松葉杖 山 月  
 建築の土臺が出来る石の音 琴 月  
 工事するまでをテニスのコートに 萬よし  
 工事から戻る法被の巻煙草 同  
 (佳)工事場の一人舊患露見する 松 郎  
 (佳)御近所に病人が基礎工事 同  
 (佳)工事場へ二號も尋ねて來 凡 平  
 (佳)鳥籠の様に工事は圍まれる 三 巴  
 (佳)燒跡の工事水道細く出る 同  
 (人)この工事親方同志腕を組み 皆 天  
 (地)大川の中に工事の灯がこぼれ 松 郎  
 (天)次ぎの工事に流れ渡つて 仰天子  
 (軸)淀川の兒なる足場で恙なし 刀 三  
 置いてある様に監督部屋は建ち 同

◇ 史 風 選

大工事今日も同んなじ杭を打ち 眠 聲  
 小頭の事で工事場引揚げる 凡 平  
 工場へ追はれた犬が迷つて來る 屏三呂  
 工事云ふ工事ではありまん 案山子  
 拾圓の相違で工事他人に落ち 仰天子  
 難工事今日も戸板が一つ出る 三 巴

掘り上げた土に危ない灯を點し 山 美  
 工場の監督わざと叱りつけ 黒 朗  
 銀行の工事が目立つ出舍街 光 朗  
 工事中朝鮮人の家が建ち 逸 錢  
 工場へ嫁は褌で使ひなり 一 聲  
 工場で旦那笑つてゐる斗り 柳 人  
 一工事濟めば儲かる當てで呑み 辰 進 子  
 板圍ひいつ取りかゝることも知れ 琴 月  
 市電ちこ工事のここ待たされ 元 山  
 金の要る工事隣座へ申し附け 突 支 坊  
 工場を通る荷馬車は叩かれる 山 月  
 地上げ丈け出來て工事は中止 炭 車  
 起工式澁澤さんの顔も見ね 松 郎  
 停留所待つ間工事は覗かれる 聞 踏  
 工場へ親分西洋人を連れ 蚊 十  
 晝寢まで工事の音のリズム來る 萬よし  
 (五客)この頃は工事の方へ金 露 斗  
 工場の唄に子守の影が落ち 南 天 棒  
 靴音がするこ地下足袋掘りか 山 月  
 工場の前を娘は逃げるやう 秀 甫  
 總會に關せず工事急いで居 松 郎  
 (人)工事なかばに解散となり 同  
 (地)工場でやられますと松葉杖 山 月  
 (天)復興の聲はき工事涉ぎらず 樂 居  
 心外な工事に課長呼び出され 史 風

新戎橋より

容器の内容 萬よし 生

一升の樽に二升の水は這入らないが、一葉の微にも宇宙を窺ふこゝろが出来る。釋尊は印度より大きく、橋牛は博文館より大きく、子規は日本新聞より大きく、豊彦は新川の貧民窟よりも大きい。鷹治郎は中座より大きく、越路は久樂よりも大きかつた。万よしは、町内で顔役でないから、町内よりも万よしの方が小さいと云へは少々不服を訴へる。川柳雜誌の同人が、悉く川柳雜誌より小さく、番傘の茶話會員が皆番傘より小さく、大阪の研究會員の誰もが大阪よりも小さきは絶対に言い得ない。

各個人はその所屬團體よりも大きな人生を持つてゐることを無視するところに何等かの破綻を生ずる。



(二) 妻帯者の悲哀

『明日から出勤して貰はなくてもよろしい』『それはどういふ譯です』『社の都合ですから悪くミつてくれては困る』『だって理由なしに鹹首にされるのは可笑しいぢやありませんか、僕には妻子があるんですぜ』『そこが吐の都合なんだ、君も判らん男ぢやないか』



ヤミいふほぎなぐりつけられた。こゝで夢はさめた。凸山の偉大なる鼻の先につきつ

『勝手に鹹首にして判らん男だ』  
 おいて君も判らん男だ  
 こは怪しからん』  
 斯く叫ぶなり凸山は、課長の横ツ面をなぐりつけやうとしたら反對にイ

万よし漫筆帳より

鬼灯 路郎選

鬼灯で遊んでゐたもついで昨日馬行  
 逢ふてゐるしよま鬼灯呪り續け 同  
 鬼灯ミこもに近づく足の音 同  
 鬼灯をならすみんなに送られて 同  
 母若かければ鬼灯の赤し刀三  
 鬼灯へ男があると思はれず 同  
 鬼灯へ妹の方が脊が高し 同  
 鬼灯のはつきりさみる天の川 同  
 鬼灯を冷たく落さすひざ枕松郎  
 鬼灯を吐いて男消わらまひ 同  
 鬼灯ミ櫻ン坊を嬉しがり 同  
 誰れにでも惚れます見ゆ鬼灯 万よし

# 川柳塔

○ 井上 刀三

強ひて疑へば妻の柔順さ  
占ひの様に船長戻つて來  
その筋に注意をされる程になり  
媾曳へ月何處までもついて來る  
瘦せて居る事が嬉しい初裕  
片付けてみるに淋しい部屋になり  
鼻の低い子を連れて暑さを里歸り  
二階から嫁の若さを聞いてゐる  
淺間しい息子散髪して戻り  
情熱は利休を履いて言ひに來る

○ 高橋 古城山

失戀へ脊中を叩く友が來る  
垢のない脊中を弟子は洗はされ  
他所事のやうに若妻買ひに行き  
琴を弾く手付き女房さは見ぬす

釣葱今日は女房の水に暮れ  
卑しけに見へる素面の妻楊枝

○ 太田 一聲

芝居ばて近所の火事も見て歸り  
夕方にも孫を背負つた立話  
奥様にさやうくミ上女中

○ 森田 輝翠

差當りこうして置きに垣綴り  
ちこ忙はし電話のベルへ蹴躓づき  
其處までは言ふなミ話じみになり  
側杖を喰つてそれから寄つかず  
もう少し遊ばせてやれ縫ひ上げる  
臆病の今日も口數控へて來  
入智慧ミ知られ急所をまた衝かれ  
また父を踏みつけにする口を利き

○ 庄 萬よし

寢ころんで見る庭木は別な色  
縁談にまで甲乙がつき廻り  
帯締にもう母さいふ色を見せ  
煽風機もう秋が來た汚れやう  
傳説の程もないが人魚の眼

壹圓の朝顔すらり庭に満ち  
借金を断るこゝも人間味  
やつゝ寝た晝寝へ大阪放送局

○ 河南 放馬

酔はせてもウンミは言はぬ指輪の値  
浮提けて泳ぎ疲れた顔をする  
災難の話の續く外科のドナー  
船長の宅船長の額をかけ  
強ひられて飲んだミ言ふも新世帯  
佛壇のマツチを借りて叱られる

○ 岩崎 柳路

定宿へオパードリスを置き忘れ  
ハルビンで一人逃がした曲馬團  
樂屋への合圖落語家巧くなり  
お上からお下りを喰ふ下女ミ下女  
裏梯子ライスカレーが来た知らせ  
美しき君ミ今夜の別れなり  
二階迄氣兼ねて昇るエレベーター  
賞められる裸踊の馬鹿らしさ  
郊外へ今日からミ云ふ定期なり

○ 原史 風

旅馴れて須磨や舞子を寝てしまひ

われ乍ら苦しき時嘘をほめ  
齒磨を使ふ間もない汽車を降り  
電話からサツパリ酔はぬ酒になり  
手帳から北の新天地を思ひ出し  
まだ見たい芝居を藝妓連れ出され  
黙々ミ社長工事場通り抜け

○ 黒木 莢豆

ぬぎたまへ井戸からあがる心太  
べちやん二の財布べちやんこの私  
四十の藝者鬼灯が鳴り

○ 塚崎 松郎

化けたかのやうにボブラの葉はしほれ  
暫くは眞つ黒く吐く煙出し  
あやまちを叱つて電話室へ立ち  
家出した蝙蝠傘につツク雨  
○ 橋本 一柳子

歸つて見れば朝顔もしほれてる  
水泳は河越ゆるかミ思はせる  
穴堀つてゐる人間ミ話し合ひ

○ 摩耶山 (三句)

石段へ汗だらだらミ落すなり  
摩耶山で晝寝の姿見て戻る  
曳船が神戸素通りしてる様



# 編 輯 後 記

●暑くても本社では盛んに川柳のために活躍いたして居ります別項記載の通り納涼船川柳句會が非常な盛會で終つた事は近來愉快なもの一つでした。毎年こう云ふ會をやりたいと思つて居ります。それにしてもこの頃の發會者とその數に於て到底兩三年前の句會と比較にならないのは川柳界のためまことに喜ばしいことです。

●去る十五日神戸に於て青明忌を營みました。是亦盛會であつた事を御報せ申します。當夜いづく便宜をおばかり下さつた紋太一閑子、南耕、光朗、彩霞の諸氏及びその他の方々の御厚意を感謝いたします。

●八月は矢張り曇り故か、避暑がてらに或は

海に或は山に旅行された方が可成りありました。まづ主幹の比叡山行（これは避暑ではなく用事で行かれたのだそうです、近作旅の句参照）

## 柳 珍 堂 忌

日 時 九月六日午後七時

會 場 大阪市港區八條通二丁目  
(市電千舟橋下車東五丁)

築港託兒所樓上

兼 題 「藏」三句 松 郎 選

會 費 金貳拾錢

## 柳 翁 忌

日 時 九月十八日午後六時

會 場 大阪南區清水町停留所西入

端 の 坊

兼 題 「黻」三句 路 郎 選

會 費 金貳拾錢

刀三氏の四國行などがその主なるものです。その刀三氏が金比羅から飛ばした杓子が料金不足で迷惑を被られた人が可成りあつたやうで非常に恐縮してゐます。一寸本人に代つてお詫び申して置きます。

●同中甸飯山、元山兩氏は郷里四國に歸省。

●二柳子氏は摩耶山で晝寝をして來ました。

●同人松雨、一洲、雅幽の諸氏が近來健康を害れて居られます。速かに全快せられん事を祈ります。

●朝鮮の水害は我々の頭に新たな衝動を興へました。謹んで同地の柳友諸兄の健在を祈ります。

●本號に阪井久良岐氏の有益な原稿を掲載し得た事、漫讀に吉田きよし勳伯の才筆を得た事を讀者諸君と共に喜びます。

●每號乍ら記事輻輳に今號も省二氏の「玩具箱」坂馬氏の小集吟その他次號に廻したものが可成りありました。

●同人雅幽氏は今回港區鶴町四丁目一九九番地へ轉居されました。

●前號九頁「初戀」に添はしたい氣の母親「乾坤は女親」の誤り。同第二〇頁「川柳家戸傳調」阪井久良岐氏の項(三)七段老人は九段老人の誤り。同(八)森津子精神的後援者さあるは森津子の誤りに付訂正。

●本號は暑さの中を主幹と二柳子、松郎、刀三兄と私とで愉快に編輯を終りました。夕方舊同人の芦種啞人の二君が一寸事務所へ顔を見せました。

●終りに主幹並に同人宛に暑中の御見舞を下さつた各地の柳友諸氏に厚く御禮申しあげます。  
(馬行生)



# 投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳舞誌原稿」に封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せすべて返信料封入のこゝ。

# 募集

## 第二卷第十一號課題

九月十五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼卯 前田雀 郎選
- ▼石屋 高橋古城 山選
- ▼舊家 林田馬行 共選  
矢田右大臣

## 第二卷第十二號課題

十月十五日締切  
(各題二十句以内)

- ▼襟垢 相元紋 太選
- ▼小屋 吉本寛 汀選
- ▼肌 塚崎松郎 共選  
橋本二柳子

## 每號募集

- ▼近作柳樽(五十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

## 社告

今社務一切(編輯、に關する件、投句、購讀、廣告)の用件は下記川柳舞誌社事務所宛にお願ひ致します

## 價定

一部 參拾錢(郵)  
六部 壹圓六拾錢(稅)  
十二部 參圓(共)

## 廣告料

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は攝替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳舞誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年八月廿五日印刷

大正十四年九月一日發行

第二卷第九號  
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎  
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地  
發行所 川柳舞誌社  
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地  
振替大阪三五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

## 川柳舞誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

## 賣捌書店

(大阪) 明文堂 柳屋  
(東京) 東條 三宅 (神戸) 米田  
(金澤) 石井 (京都) 三須 (函館) 石塚  
(松任)

# 川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

關本雅幽	庄萬よし	佐々木黙闇	駒井美の作	矢田右大臣	塚崎松郎	高見柳骨（入營中）	高橋かほる	河南放馬	太田徹底郎	西垣松雨	橋本二柳子	原史風	岩崎柳路
		森田輝翠	宮内一洲	柳川洲馬	黒木莢豆	竹内多聞	高橋古城山	龜井花童子	太田一柳	徳田双柳	二木幸堂	林田馬行	井上刀三

第十四支部	第十三支部	第十二支部	第十一支部	第十支部	第九支部	第八支部	第七支部	第六支部	第五支部	第四支部	第三支部	第二支部	第一支部
朝鮮仁川仲町二丁目八	大阪市住吉區安立町五丁目二二三	函館市青柳町五〇	東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内	大阪市外豐中榮通二丁目石賀方	山口縣山口町石原小路	神戸市上中島町一丁目四二	大阪市東淀川區南濱町一八二	兵庫縣武庫郡六甲苦樂園	大阪市東區餌差町二二一番地	大阪市港區鶴町四丁目一九九	岸和田市下野町四一九	大阪市北區南同心町二丁目四五〇	大阪市南區新戎橋南詰
幹事 矢田	幹事 徳田	幹事 龜井	幹事 岩崎	幹事 林田	幹事 柳川	幹事 宮内	幹事 西垣	幹事 佐々木	幹事 駒井	幹事 關本	幹事 太田	幹事 原史	幹事 庄萬
右大臣	双柳	花童子	柳路	馬行	洲馬	一洲	松雨	黙闇	美の作	雅幽	一聲	風	し

# 藥新病糖尿

インスメリチン Insmellitin

## 本劑

は本研究所創製にかゝる二種の獨立特效藥（各種糖尿病に對し）パホミン「腺臟抽出物」ニヤタロン「五加科植物抽出物」を主藥とする錠劑なり

## 特色

パホミンは簡單なる徑口的攝取により安全に血糖及尿糖を容易に〇、二以下に降下せしめ得、ヤタロンは器質的病變に及ぼす根本的恢復整調作用を司る

◇日常の生活に拘束を加へず◇ 副作用絶無

## 適應症

各種糖尿病、腎臟病兼糖尿病、結核兼糖尿病、糖尿病に起因する口渴、饑餓感、瘵瘵、癆、常習便秘、不眠症

## 包裝

インスメリチン錠 九〇錠入 一三圓十五日分 一八〇錠入 二五圓（卅日分）

## 醫科專用

・Pahomin + Yalaton = Insmellitin

Pahominpl. 25gr. 50gr. } の御注文は發賣元へ乞ふ  
Yalatonpl. 50gr. 100gr. }

發賣元 大阪市東區仁右衛門町二八八

熊谷英商店

製藥所 大阪市東區仁右衛門町二八八

熊谷研究 所

（概説實驗及抄録進呈）

電話東三五一四 振替大阪七一〇一三

## 一 特約店

東京 銀座 松屋吳服店新藥部  
大阪長堀橋 高嶋屋吳服店新藥部  
名古屋中區 松坂屋新藥部